

七部集大鏡

春の  
日  
初  
懐  
紙

二



春九日

信濃何九撰釋

増書れうら

一書に法が納言の言を去る所多かしのやうにして  
 くむらひてしきりしをいへばくもれとありを發  
 端とせりといふ。愚考阿部くをりを述ぶるよ  
 まりともれらるる重五の枝折れけり竹牆を  
 追々小自氏文集曰王架三間新草堂石階松  
 柱竹編牆形との密も阿部。無味堂曰重五  
 松井半七名古金の郊亦足尾村小別  
 莊を志はらふ

・ 漢平寺より汗の帷子脱之む  
 ・ 北のくちろみく笛をいふとく

愚考此傳より後よりなる此の言は其の笛形  
 を名笛よりして二と号すといふ次は往古  
 の由来より初ね入ふ黃帝の時鳳凰來儀寸昆  
 溪の竹を伐り鳳凰の鳴きよらるるを  
 一笛形を是と必聖代の兆なりといふ  
 を附するなり其の笛は文王此傳より  
 ・ 文王此れ中よりふくははりて  
 ・ 雨の志はくくの角此形より

世上の説より文王圃方七十里芻蕘者往雉兔  
 者往只矣臺矣沼を築くと此のいひうら  
 するを大なる非なり是より邊世の俗傳  
 あらざるを知らず此傳を字記す小文王  
 の一言をいひて傳白此説をいふ人いふ  
 以先注ありといふ通の最白の後白ふたありて

あそ當るを解す一書述るをふりしり  
人を文王の徳を阿けて子よあをむすひ  
ふる杜撰憶説しりて皆阿てくひりのる  
詩の大雅文王之什曰周原曠々董茶如飴爰  
始爰謀爰契我龜曰止日時築室于茲擗之  
際ウチノトコロ度トク之ノ龜カメ之ノ築ツク之ノ登ト前マエ屢タガヒ馮ト百堵皆發  
鼙鼓弗勝宙をいしてく涙と阿るを引出し  
て土はらりと附らるといふ字を心よ持て角の  
る字に字とるを働するなり茶の築先丸くして  
南る一木外連ハ槐のぬく響の好といふやう  
ふりれるなり

● 多る者より半を美れ砂りり  
● 魚考イサノコト議倉八幡を考治より社檀より十八  
町すして此處砂浜くして三足往て二足戻る

のめし半るといふ砂浜といふ他タの神社も非す  
● 花よ長男の帛ヒト鳥阿らり以

● 魚考凡中なる事物紀原曰爲軍用韓信所  
造云々名物六帖云唐書曰悅傳張丕急以  
紙爲風箏高百丈過悅營上悅使善射者  
射之下略全体を長男の阿く一きりものぬり  
そまをちやくして小兒兎臺のりて阿るは  
博物志曰紙考糸を引て上りる兎臺のるを  
明てのそみえをいふ是内熱を洩さむるあり  
そまを長男の阿らり故とゆりまらるる善まの  
形容あり議倉尼物よよき時分なり  
● いとものりこき 五位 礼針立  
● 松北木よ宮司の門をうつふまそ  
● ともごいの説と見えぬ志がまそ

愚考五位の封函は附するを神祇の官司よ  
を何ら以て后宮司として對の附るるのゆへに  
一孔あとも見えぬと禁中札志にるるを遂  
るともをせしるる職系曰針博士七位典系改ふ  
尋して五位と云て

・ 朝不らげ三齋を考ふとらけの(紅)

愚考考考未明のききよて人の往來をい  
見えぬよ三齋貫の朝起を附する一寺よ  
とらまはると書して附るるを云は改めり  
やうもとのをねらするのやうよ見えぬ族も  
ありと見ゆ迄改の御書を粗見るよなりて  
す心およぶるとぬきりと留ねるるぬきと  
ぬきの敷もかゝるに類はしき次第よありや  
一書にるるといふてよえを推してしるる

一ういといふよよいしよふんをえぬと云え  
ふりしよし書よふ中い三齋をとらまはると云  
て改めりのすむぬに改の能思案あり一なり  
そやといひ改めぬと一むのをささるぬる一けり  
ありと云る一のてよえよて白きよはむす  
たりと至てきくしてそやと心れのつてよえよ  
て百よ一のそあえり改改のふとを一みき  
といふてよえを改し解していふ

・ 種・ 莫・ 生・ 小・ 養・ を・ 住・ 居・ 小・ 佐・ 外・ 一・ 月  
・ 戒・ 名・ を・ 捨・ の・ 名・ よ・ ぶ・ 不・ 月

孝宣曰中次雅波よ米屋太助といふの米穀  
を賣買するを家業とすその住ちちよよ  
横切らぬありて世渡りの通改しうて官融  
して自かれ捨をうけたり一の天後地改のよ

亡びてかけ出する所ありてひるりせんはけりこれ  
俊村の爲よ又代を構ふ費し後よ家来とありて  
小菰ひらり賣れり住否とありてのそ運とていく不  
と好く代りてそりて絶たりてそりて時れ人  
此構をち高助構と呼らるるなりとありて此構  
ひらり存して海防堀本ら此不可なりとあり  
新無 ちり 出家 かくし

かくしす西りありて致よすむ  
治純ひとりを二人してとり

成美曰西行家集よきくはるまをそりし智心か  
とくす寸山田、原れ此のむら<sup>三</sup> 一書よ貞享  
元年世きき一記りよ芋洗よ女西りありて  
致よすむ此白を取て連るとありてあり  
愚考二白の附素をその如し治純のほきハ

朝懸れ裾の西行谷の侍よて芋洗よ白れ余意  
を取て附らるるありそり祖籍の白を取て  
附白よ又附白を取て不白とすり可あり  
附白を附よ赤身守族と見ゆるは徳治よと  
き人のふるあり

せよあらしぬ局泪よ奉りて

一書に中院の局小督の爲るるの侍ありと云  
愚考淺海の附を又見よハ是余小督の局ありとの  
侍ありとの局櫻町中納言成範郷れ女  
高倉帝れ妃あり法盛のそねみをうけ浅海  
世よのらよ大井川よ入水して失ふ墓ハ  
浅海の天龍寺あり

まよ良坂や畑うけ山の八重木  
愚考まよ良の娘の八重とくらと縁して

高の巻八平橋の名成多し一まふら坂ハ一名  
彼若坂と有り

口すくつぎ清水 乳のあり

愚考喜の語ふはもろく只口をすくまふら  
之解ふうれく出そ養生論曰二月行旅勿  
飲陰地流泉令人發瘧是不可知也喜ふ  
附くまくと只口すくつぎまふら  
らけ難ふあつうひーるん

● 芝 白き大・秦 祭 過ふまふら

弁池曰日本紀曰仁徳天皇四十二年百濟の  
王子秦酒公尊此名通なり雄略帝の時帛  
紗を献ふあゆ一よ大秦の姓を賜ふと云  
高  
豆麻佐系を九月十二日乞を牛祭といふ  
菊 あり垣ふよい子見えおれ

● 表所ゆはりて二人 髪判む

● 曉 いのふ 車 ゆくすら

一書ふ秦氏の家没落き一おろし二人の子  
あり兄を竹王弟を約王と云牛飼草刈あ  
とて大秦の里ふきしむ一あり後世ふ  
樂人よりありりるあり東儀氏を此まらり字  
治松遠ふ東洞院より行臨車といふ変化あり  
夜よ入ハ門戸を用て往來あり此変化目一ツ  
よして足と一本あり彼車を押りふあ人  
いそくふ戸の草穴より何いんはよよ変化の云  
やうを我をいんむよのいの子をえよこり  
おろり子てみまはし子るありその人一首の  
歌を詠す罪とこの我よあそ何事こ小車のや  
ふこいわりぬ子をこくくして此歌を字て感

一 くらや子をとくしあり 愚考よい子を  
見ておろそりいふくわて世を渡しと夫湯の  
賢判て火宅をのり運むとるなり嘆いといふ車  
ゆくとらとる其世の嘆いといふなり  
ゆやのりともとる来々を舟の車一舟の法率  
三車一葉の心を教ふ世中を牛乳車のさるる  
とん思ひの家をいりて出あり又家祇の附ふ  
前る許りきりおりの家を出行らんといふる  
ふ曉いといふ車やる者夫三車一葉といふる羊  
車鹿車牛車彼三車をいして法子を誘引し  
而後ふ只大車の宝物をとりて莊嚴し女穩身  
一なりをとりあり三車ふまはつしとるん火  
の車るるふといふ階ありすつていふん法あり  
るんも平坐の儀法平信堂えゆかきふといふ  
とらんとよるとるなりなりなり

・ 蘇くしのみ まるくす 万日の系

一 書ふ万日の系ある嘆きよあきとくも安ふ  
る万日の金式あるなるなりなりなり

・ 高ろひまら本の根 不花の鉄とらむ

枚亭曰鉄の魚を 胡椒と酔ふのなるなる  
の葉をとりみちりて水上よおそく浮て泳ると

・ 御ひそをる 喜れ 湯の山

愚考湯の山を 採津必有るの温泉之舒明  
帝三年涌出ると云く則十月行幸あり是温泉  
行幸の始なり鉄よめ修くくみゆきを云獲の  
神るるんをるありありのいしてゆするなり  
傍正院文を書写し 泉を不修むとるなり  
あり湯の山採現とやるる日本第一の名湯と

云く一復ふ湯殿山有りそきゆけ帯此附  
ありてとて大よ非有り湯殿山を出生有り那  
智を湯の峯有り必是もを阿らるる下

のときや紫の杖 伊勢の帯  
此もふ種しの新復阿らるるひも有り  
つきてはも見えねも略つ 一書ふ鹿嶋の  
帯隆帯 有りといふ云く 一説ふ東西必し  
のよきえんむを 帯杖と 廣く有りといふ  
るる下

・内侍のえり敷代これ 眉の図

一書ふ内侍を友女有り天子の御例も有りて  
法も 執行ふ女あり有り古今に眉をえりて  
物をえりて有りて有りて 愚考眉黛を唐土  
より有りて秦ふ初り明皇避安祿山難幸成都

今画工美十眉圖所謂連頭八字走山倒暈  
横雲去鸞羽翠新月卦月柳絮幾眉是也卓  
文君の眉も黛をやくといふてを山をの  
そむのえりて有りて和漢眉の圖異ちる下

・のむり軍れ中を斤ウすふ

自當の内侍と見え義貞の侍ふといふ有り  
義貞内侍を有て軍をえりてを有り曆應元  
年越前黒丸の城ふれりて流矢ふ中りて  
名も有り 粟と有りてありあけ

一書ふ大岡小田系侍れ時相列山中れ村老

搦粟を献上せり事あり

・夜うす衣を馬ふ寺見連や

愚考孫津園田中金鼓寺あり千觀阿闍梨  
寺役のいと有り馬を返り淀川筋一出て



往來の旅を助けぬ或る酒呑も或る寺  
あはれに遊ぶる一宿をいひて銀難を  
くひたりと元亨歌書杖束隱逸傳等より  
其甚父子を歡喜みいひて好する  
よる歡と号す平生笑教りて遺像を笑  
と唱ふと云て頼阿の聖集より

・小の魂 ちかはらきこころの月

愚考馬より寺といふをえ込て増すを必  
天王寺とあり之をいふ太子黒のりれ侍り  
て二月の魂より侍りる和漢語より曰倭國  
傳法のえ始り建天王寺推古帝三十九年  
二月廿二日化四十九歳と云く魂奈れ事を往古  
を六益あり二月十五日五月十五日七月十四日八  
月十五日九月十六日十二月晦日 報恩に目見え  
をりるを混すへん

・陽をれをえのりるを文 ぬりて

・まを袖より 師 教 いましく

・因を指て花なる 里より遊る

愚考此三句を國柵の翁の侍るり源平盛衰  
記曰諸兄系天皇天伴王子 ねそそをひて  
吉野の興より云のそそそ此と云く國柵の翁粟  
の山料より云といふ魚を供師より師天皇  
寺製よりみりての國柵の翁のりるを  
をりるれみりてを遊りるをいふ  
の翁支殿るり後の花見る里より 師の院より  
して遊らるる

・ちりりの 筋をほきし中の子  
・池や三井れ未とれ初とくふ

愚考淺井家の長久保若源三盛安通世  
一して志賀寺の廢地を再興して盛安寺と号し  
て相續寸是ハ崇徳寺の流るれとありと云ふと  
る台依りたるものあり次此傳を近江の山との  
雪けしきを所しらるる

・ 言ひくれみそゆきへのやまし  
・ 見守りし廿九日此月きまき

愚考是も阿佛尼の十六夜日記の傍之安藤門  
院阿佛尼孫子れる氏郷と云ふ武平寺の古と云  
はきて後倉表一併伝ふ下あり十月廿九日  
の早天よ箱根の山よりありふ廿九日此月の  
出一母をえん多ひてと彼日記ふくハ一去を逢ハ  
ゆはるる時しつ流るとりといふ雲の山ことつひ  
十九日此月とむすひたる眼力甘賞すらふ後あり

お字に  
水字に

そま二花三月をきりし法るりそまをま  
巻れ月四の年するそ世評ふ月るそ之浪の台八月  
ふありんるとりありそまを辨ふありしとすそ  
すの追加の表合ふ月るそとつひ八月よりあり  
らんやまよつりてそまをきりし一月花を一卷  
の的るそまハ共白く出そすそま此巻の月三の  
るりる短るの月るそまハ字ふ至て廿九日此月の  
とこのすらるるそまをりてその補ひとるるそまのそる

・ 君れははとめよ水少みわけ

愚考大和のりりふ壬生れ忠岑泉の大持の  
山傳ふそ時平公の山飯一まうてそり外りそ酒  
るそまをりそま夜ゆて受てそまを大長と和と  
るそまをいけりそまのりそまをそまとけりそま  
るりるに松子ありそまをそまをそまをそまをそまを

かしく大形の山姥にて此階のトト松崎と介  
影うひき方ほきては消息とやてとりあは  
忠岑うきききのりくちのそくれまのうてを、夜  
半よふふけけ踏交ふあをせめて大はれき  
まむろろくく食應一あかと云く良辰れ  
勅功度大形りの月さよまきとり入をよまて一白  
のくちよ、まそのま味を傳う舞入ま妙なり  
霜をくみりけと依りつきをま勢の雲を透る  
あ中よまあみわあてとま依るま山雲ま雪  
零あうりのま雪雨入み氷ま水の化るまはり  
りのよ頼る一まうあう此故事よよまを後  
水を附てせのうまひをくくまむや

蛙のみ字てゆへ一まき森まうか

成美曰源順和名鋤よまゆ一まきま忌ま後るり  
夫をりてくまのまのまのま一用ゆ  
芝山曰南史曰孔稚珪齊明帝之時為南郡太守  
門庭之内草莖不剪中有蛙啼王晏嘗鳴鼓  
吹候之聞群蛙鳴曰此殊聒人耳珪云我聽鼓  
吹殆不及此晏有慙邑此まま於叢等一まを  
出て名まきま出るまま且葉を孔稚珪よ取て  
のま後るり一  
額よあくま 再れりり  
愚考章孝標詩之一聯田家五五行水早  
ト蛙聲ま等よ前合一ま服まりの山申  
無曆目のまま叶まつきまなりのままめま  
とりよより枕をりけて額よ雨のりをり  
けくらまら一次にま第三のまよ宿りりてとハ

か白をう服をう一着ふ取てその人を定むる  
又四のめも又その人れ心りて内をうばる事  
可くとも皆意を別りて人を一人有りて  
其体よか一持する時を階白れをこひつる  
体をとるしるより一概よきる人を我白服  
内なる事を第三の持の場よて必お一出一又  
服ある事ハ第三ハ必内一入ぬハるる事  
をりし族も有りありて信すくは  
日追加の六百を皆おしりて内を併し  
等しそくもうくをさすし只途の  
ふ途附廻し上ふ附りうまは何の  
岩れるより發見ゆりさと

愚考新澤入控歴の以取臥のありし  
赤雲のりふ雲剣サキの優る伴あり  
そひ一もり同より發れ又えたりとい  
餘鬼あり後台ふ瓶やくあり  
樗山房列ふ長者ケ傍といふ  
ふれ船のたそきくを待ひて大岩を  
あげさせて沖の船を見  
岩の上ふ丈端ともの  
いふ今控岩上ふ丈端石の形あり  
附しそのひるむや  
施餉鬼れ傍といふ  
の浦を心ふもちて附らるる  
産の地及び出家家密つふ入り  
海谷山善通寺あり四國八十八ヶ  
次の岩間よりと階なる海  
海と系くつる

町ありて海上よりりのもむ時々出傍の岩小塔  
ありともさかりてありしは海、葉ありその  
いひよそ陶器を製す志度焼といひ山の  
白くとも海上よりうちさきのめくは葉葉  
よりのさきり附るり大くは葉葉一きをね  
りひまきり形り一

・解てやねらむ枝むすしね

一書し世ありし往来の人の及めをさしりし  
杉の枝ありしむすひはさしりるり岩代のむすひ  
松を寄るれ王子れ故りありそ葉葉あり  
ありそありし 愚考むすひ松を岩代と葉

しあり紀別岩代山のむすひ松を有馬れ王子の  
むすひありてよありし日本紀し岩代の漢  
松枝を引むすひありし葉葉ありしとむすひとそ

とそねのよ又拾遺集しある松好患家ありてハ  
えよいりしものむすひ松何年を疑とすも葉葉  
とく一き又洛中ハ伊勢の寺の葉葉ありしものむ  
すひ松あり附る紀の岩代の杉の傍ちる一し  
ひさきさしりも葉葉のひさきのさしりし葉葉の  
よ知己の傍ありしを葉葉ありし一しありしを  
うし葉葉ありしとそむすひ松を解てやむとあり被  
よ此葉葉のむすひ松を解てやむとあり被  
患の事しきを葉葉ありしとく一きとけしを心  
にさしてありしとありしありしありし

・今よありしとけしありしとけしやありぬ  
・同十九日荷字室あり

愚考傳し曰短白のて苗ふ苗を百韻子白あり  
とありし法のなり此巻短白のふ苗二つあり

ゆつふ此の利書とて且其書と名を言ふは室を二  
度の能書ありふありて短白れふ苗を引くは  
りのあり初懐紙の中短白のふ苗二ヶありこの  
百款と申す十款は二ヶふ出ぬるは能書る是  
ハ短白れふ苗二ヶふありと書きんふを箱の自注  
とのふ花れ故事といふ注書も五十款ありて  
後五十款の注を引くは二ヶありて  
百款の二度ありて是則二度ありてふと  
ゆふりもふありと書きんふは法  
犯す一くひるを違ひ此能書ふ百款の中短  
白れて苗三ヶふありを引くは此ふも種し法の  
やふもくは能書るを数多見え及ふの條止るを  
引くは其の罪を犯すのふすを違ひ違ひを短  
率慢るを引くは二ヶありてふ味す人のすくはく  
ありり半を引くは二ヶありてふ

●秋の和名 山 づら 頃

愚考源順を撰録天皇四世左馬助攀之男能書  
中位下あり和歌の達人梨壺の五歌仙古今を  
叙の才人永観元年奉行年七十三自然智人  
として和名抄を本朝の龜鑑あり

●あまの月 よるふりやうを

●詠を花 曰ま ありを唐書して

一書ふ山門や三井寺の甲の髪を唐書ふは  
ありり曰まの甲の抱女を書きんふは  
一書ふ法ふありは昔の詠の教ゆふのふい  
といふりて 一書ふ堂上ふ方の女中の旅ふ  
出の極あり詠を花とを和の才を詠ふありて  
といふりて曰まを大徳あり曰まありてふ

雙のりてありしと旅の連てまよりのを松よ  
巻て唐梅よ結上しるり 愚考此解を面白  
くしむまへしを連と左よりハありは先注のまよ  
にまよ大伴の托女時あり前白れうはりのよりを  
松と別く旅人の字ありし一夜書れ侍りし  
女中れ旅客ありあり一柴屋所八町ををりし  
りし故よ曰まよとまより 成美曰蟬丸を延喜  
第四の宮よてれりしその源丸の奥概あまは  
よの園れありしを曰まよ川まよとりし  
・ 銀鷗の 瓢のありてまよハ別く

一書よ武田伊豆守信重入及して大黒庵銀鷗  
と号す東山後よ仕つて茶室よよ書し 或人同此  
銀鷗の類よてまよるまよの台れ附まよるま  
しと難す愚考陳曰考ありといしとまよるまよ連歌

此附肌むはしししてまよるりしとむと止むい  
初よありてまよるのありしを記す銀鷗の語を  
書し瓢の花生ありを隱去の米入りて小指をり  
中よ米形きを一るれ優るありまよるまよのまよ  
と銀向をまよる連歌師のありしまよる連歌の  
りしとまよるあり米まよるまよる連歌の今  
をまよるいしとまよるまよるまよるまよる  
らるまよる銀鷗の利休れ師京曰桑急ひすの宮  
よ隣りのありし大黒庵と号すしと和漢三才  
圖會よ見ゆ

・ 連歌れりしとまよるいしとまよる  
・ 滝壺よ柴押よびてまよるとまよる  
一書よ井蛙抄よ曰後醍醐の清時吉田家よ  
て清連歌ありし女房各内侍お内侍は

て字中よ信ひきり民部卿入る女高のり次よ  
て小字の際よ伺公きし連たるこの身杞不らよ  
して滝のひくきよふりきまて合てはう系連さる  
かよよは連歌も志すさるり多りよる教少  
山よりの柴を折て滝の流るあよよくしきり  
信のきまて水の音もやえはるりよ多りと云

・岩 昔とりの 籠よきけり  
弁地日匠材集よカハ十草として水の底よ生  
すよ文よ連えあを流るとりて籠を流り  
その中よ入て松柏の本よよふ流るの繩を  
流の流けて夫より籠よて数丈の谷一から  
山川の鮭とりるよよ又しうくのめくするる  
・菰 二枚よ 廣 手くわりの  
・物 出との流あよ連さるる流る

あつる雲居探師喜撰法所意好秋あるし  
よ連さるり付よりよるく一きよあるりやるを鴨長  
よ定さるる菰後の附壘橋を味よよ一第一  
雲居探師の 笠 横の五尺よふよふあふれ  
あまはる連さるしよよあふれよとるて流けて  
あるりよそこを流るるとりよ一尺よて天明の付  
よ附りよめりよりのあるり方丈の記よ云 廣  
北よ少地を志ああるり流るあ壘をこのこ  
ひて雲と守則りあるしよの葉をようゆと云  
まよよ方丈の記よ一丈は方るり菰二枚よ廣  
きことあまはる連さるり流るよよ流るりよ  
付よ必定をり葉をよるり流けて流るると  
流るりよの流るりよの流るりよと云  
・基 少を わるるきぬくの月



信は九州  
陸軍部と  
あり陸軍  
部と果た  
す大佐の  
者によ  
あること

愚考此の郊外一送りてあまを懐かき  
るのきりめくを意に限りは只よわい  
義をさしてきぬしといふを本朝の風俗之

・ゆれぬき秋の月みよ細入よ

・きり羽の透れをとり笑ひよ

愚考躍るは深武濫よ曰長の改伊勢

のそらんしあると云くゆよ伊勢音既し

伊勢の沙汰を白れう(に)ええねよ

のりて細み出でてええいやはのさる

よても躍をすりとすいやはのさる

をとらそえよ行ふといふるを笑ひふ

むといふ伊勢の自然と白れうら

もそいあらるるを別傳白れあつ

の園の伊勢とすゆかをよのさる

一書よ雅混雑と書る八洲大原

夜男女聚會を回しうして雑り

能く系多は月一日に別坂田

よらあふと想をばしうりよ

不くる意をさるるやるを

ゆるいをさるるを通改め

滑るるる

・ゆらうし一故解れあ

考のま日一書よゆらうしと書

よる依伴親孝の傳るる日本

ゆてそのこの何れ見さの何

たりよ雇ひよしる身は別

らるるの菟の若るる舞と成

りしひるあもる古に生涯をたるとすおのりてそこの  
一これしてさかしくありしはさむしありと定め  
るべき人中の経事をたらしめしれよふありしを  
下統の通信する次は時の裁まはれりて安ん  
の詞よめてあふすあり

・行幸のためよ 洗山土器

愚考行幸多天子御幸を仙洞禁邑独断日  
天子之車駕所至臣民被之德澤以爲僥倖  
天子の行幸多幸有といふ美あり

・御のたを奪りし経治のいふめし

一書よ前白の幸多幸多たてて後経治の御白ふ交代  
きしるあり後経治のりるる古刀際經子又け  
級全ハ正月依渡る則正二月加賀大根度次三月  
越前守國吉と後経治の次御あり 一説ふ

往古を番經治國しあり月し禁由表一説ふ  
石部銀をたて献しし 善筆曰奪りし經  
治常は經治ふありし行幸の土器を洗ふを  
ゆへりのをんりおるるをいふ一國一城の主京師を  
護の番鼓しして刀銀をききするあり一昔を  
武士自りし語しし刀銀をうち用ひしあり  
さるるんその中よる大各ありぬ一そまを  
幸多しありて觀遠ありしをゆへに亂世よる  
ありぬ一事業伝ふぬとておれしるありぬ一  
おとしく書れしをゆへにゆへに伊達政  
宗細川三秋るといひゆへに銘經治りて改宗  
を於軍家よるあり三秋を禁由表自依をたて  
おはらまししをゆへにゆへにゆへにゆへに  
ゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに

して大名をとりつゝ此時代の時令の台位より  
次北門のらくとりよして考案すべし

愚考、刀劔記曰人王八十二代後鳥羽院の以時  
北条義時を誅伐し、あかぬきし敵を記すべし  
して武たよ心たよをいふ所、後鳥羽院の以時を  
もとめとよをいふ心とて、備前則宗、後中貞次  
後前延房、栗田口國友、後前順次、栗田口國友  
後前宗吉、後中次家、後前助宗、後前行國  
後前助成、後前助延、右十二人をえらひて十  
二月より院内より番上をいふ上皇も以自依  
らせり、元正師德、源治八人、栗田口久國  
後前行吉、後中次家、後中貞次、後中真次  
後中忠國、後中為次、後前真則、右八人の中  
あつて八月の番上次家入依らせり、あつて以自

燒丹のあかきを号けて御所燒とり、此時の奉り  
る光親朝の御太刀磨る國弘為貞の二人こと云  
外、幸の天子勿後あり

源治の八月の番上次家と  
月記等より辨月八月の志あり

名のあつて行幸より源治より八月のあつて三句  
のはらひはる八月の番源治次家、番鼓(行幸  
なり、あつて以自燒丹し、あつて入侍より源治を  
あつて以自燒丹し、あつて入侍より源治を  
能のあつてとよをいふ心とて、備前則宗、後中貞次  
後前延房、栗田口國友、後前順次、栗田口國友  
後前宗吉、後中次家、後前助宗、後前行國  
後前助成、後前助延、右十二人をえらひて十  
二月より院内より番上をいふ上皇も以自依  
らせり、元正師德、源治八人、栗田口久國  
後前行吉、後中次家、後中貞次、後中真次  
後中忠國、後中為次、後前真則、右八人の中  
あつて八月の番上次家入依らせり、あつて以自

以太刀磨奉り等の事あり、駈醒記ありの事

多の右等の書を因してこういふを知らず  
る。唯推量をもちて解して

昌陸の松とそそめ神代のみ

一書小昌陸多里村式連歌の花元下りて元歌  
中れ入る。一書小年し正月十日松の数を  
献ふるの柳堂の所連歌於連歌回神皇外  
方ゆふ代々法銀位小叙す

・元日此本間の競る足ゆり  
一書小年小の山ありの袖よひく約の絶せ  
ぬきうのまの産るを古歌とりるなりと云  
一書に本間を門松の元をりて障り約の毛  
りるなりと云く後りるなりと云く  
の本間あり一一年改式終て天子るをえりる

三代実録より見えたり。年よりの障りるハ  
日のくらひありしと見ゆるをえりるなりと  
る形をえりるなりと見ゆるをえりるなりと  
愚考元日の儀式を神武天皇元年小略て  
の事なりと舊事記より見ゆ本間を門松なり  
競るる則日の脚のゆりやの形をえりるなり  
一魏豹傳曰人間一世如白駒過隙耳又索隱  
曰白駒謂日影也と所連といふのうりる  
るなりと一説小本間を地各鞍るの林鹿を  
元日此吉例競る有とゆふをいぬ  
一書小貞徳の別荘若菜園をこれ即其こと  
・裡の音水不のららく梅白  
意味堂曰白氏文集より曰梅花欲開裡魚入龍門

● 曙れ人氣牡丹霞ふいらききなり  
愚考元朝の早天かめしと四ゆく人此面夏  
其のうも果和ふりしてをこしとく牡丹花のちきき  
ふひらきて餘響あつらふしとるなり

● 腰てら守え日里れ眠りこの那  
愚考予の信濃よてま搗唄の唱歌ふうくし入  
はくしはしきく山れ腰を照らす紗綾や綸子  
を腰をてら守えきるるま先れ新しきふ紗  
綾縹子等れ帯をきめてゆるやうふ守眠り存  
松を腰てら守えとゆきまらるるし

● 星ころころし霞よりぬ先の四方れ是  
愚考太一金鏡經曰燈人氏斗極を見えて  
四方れ名を定む東北西南北是るなり又内裏雜  
ふ曰九天地の間東西を控く南北をかく長し

● 小松負らむ牛此ゆ免  
愚考小松のふ子目と牛のそ入とて小松を負  
ふのまやまらむむとるなりまのふま子目とを並  
れ目とらふし熱向をく形くむ

● 芥摘とておけて酒らきと瓢うを  
愚考詩曰思樂泮水薄采其芥魯侯戾止  
在泮飲酒

● 花ふ埋てまよりの壺ふ死むる乳  
一書し花埋残ま對古人

古池や蛙 飛 小 水の音

此句を真如實相の玄章よりして在大事の  
中此大なるより申し他より評す可き白くを  
さるを何某く述るの注釈に小解あり  
少くは是れ佛語の語としていふを知らざる  
俗なる一しいり小解くも玄意を探る事あり  
音の一字をいりたりやら姿を解く魚は  
解く魚くはの玄音あり是は注釈を之を  
りのを玉と注を准金と滔すは然るを  
らむは用の舌をうこすりる述るは蕉風  
一派の所要只此一章より行くは古池集  
水鏡を見して玄中此玄を納得る魚

春野吟

是流 一とさくくを曲ふ 卷二つ

意味出日足跡を後叙者の足跡あり一處を右往  
房を柱處あり松あり芳野此ま物あり曲を  
まあり 愚考吉舟山ありて美野吟とハ歌を  
是の流をまけりといふ縁も見えぬ之  
はげす解すくまきるあり又美舟といふ  
春野よりありこれ後叙ありと名をハ撰集抄  
よ云信野國詠とといふは巻一より  
及の流の事ありといふ人の通るあり是の  
見ゆりよはまあり入見えハ折るは結梗  
のや兼清あり心とおけりるあり内は  
意より然るしすあり傍ありを述る西行  
回て云 以傍ありいりり入いり一を傍  
ありて云 一は又云は傍ありり入いり一を後傍

糸の初るる如くして此美よりと計りて余意を  
西形又奥の方へ是迄れ所のよはきうてか入るる  
よ相形し形の高ありて一様きく見えんと思ふ  
ありやうちよその傍へ當りて眠るるやい  
然生ししなりとるなり是よりやれ次第々々積るる  
暗合よいりて注す一してきてその趣を  
仍りてその根存る此美よりして物事いふは  
て端を曲て度としてたへしはるるものをと  
語の首を鏡向の形して台儀とらりしれり  
野吟依母の禮是はるる足跡るる、度ありし  
と名ありてはるりして唯そのものよんと名ん  
さうくして曲てとりてかゝるるは魂るる

● 麓 寺 くられぬりのを 橋 あり  
愚考 林下なる小倉山のうりたるもの古歌よ松の

みや双の是の琴と新踏れ月も影のあまを  
● 枝 ちやてさくられまきさるるめり  
一書よ枝る余れ本よりよ芽をさくする  
そまては是橋ようけ合をさるるものあり

● 武 彦 坊 を とくからぬ  
す けりやとてけり空れ 夜 川

愚考 玲 繫 々 山 伏 の 法 具 有 り そ 是 一 似 々  
ふ 枝 の 形 少 々 名 々 守 大 和 本 字 曰 長 終 ら  
む じ ず け 時 白 花 を ひ ら き 一 房 を 形 守 一 名 小  
て ち り 玲 繫 々 資 乃 什 物 記 曰 役 小 南 少 時  
入 箕 面 鏡 穴 直 奉 值 龍 樹 菩 薩 遺 傳 授 之 凡 以  
墨 色 乃 本 黒 色 者 不 移 余 色 唯 任 自 位 而 已 是  
則 十 界 一 念 之 義 相 也 云々  
● 夕 暮 小 雑 炊 暑 き 葉 玉 乃

敬秋云 廬倫の初の一日田夫就餉還依草

雲おかし人をやすむる月見か

一書の上西上人中しよおかし雲をけうく秋をそ月  
をりてるすうさうありを連の意あり

尾くく 寂も面白や秋は月

愚考尾くく寂も寺の秋初あり祖翁の言

ふ尾くくりの先くうる一二の翁王堂をいふ

尾くく時珍曰友樂王始以泥坯燒作之

具是意て秋のみ多し月見歌

愚考一本ふ具多き意て秋とけりる非之

すへて群集の形を画くを秋のみ多き書

て此方より見候するなり



初懐紙

信濃仰丸撰釋

愚考初懐紙の百歌を梓初るなり一書こ  
 けし小鶴百歌と唱一て題号初し此百歌を  
 前五十歌後五十歌と二巻よ成終りあるの  
 みのるり花故事といし注書なる初自  
 注と号して前五十歌の解るりこまそえ  
 卷五十歌ふ跋足千里出た後の卷を不系  
 後日る不ト峽水似春の三子出た之世人  
 志るこころある事とこまこねてしる  
 目これと云をこするに終の初みた

初ふをそのさき去年の相北実  
 愚考目のさきを月の杖ふ對しての雅  
 云るりの服を重代を脱して相の實と依  
 りて相を鳳凰の栖す一きまをそまそえ撰  
 出して此句依るり初る階登をといあるり  
 雪村の柳見よけく挿せりて

一書小人名を生前の業ふいなるぬんけりこ小忠臣  
 雪村の井はくら柳を見よ初といよ白るりの水  
 や貞徳の白よりこまをりて 雪村白雪村  
 の柳人名よあはらる宮古上下桂の男の田  
 中ふありて雪村初久なりこふいり本振  
 の佳るりを受てよりこまをりて  
 とそ京子保の昔洪水ふあふまらて枯しとそ  
 方より彼此及濬中流平の人あふとも今初るをり

酒を愧ふ入相此月

林の山手或の寺の多うらむ

炭火竈出ぬてそ此ちうらむ

里しし乃美不のり船のむら縁

愚考愧るる新厨集ふトハリスガリ門帷

戸懐とりし別暖巻之手未ちうらむ

有り日本紀曰神后皇后四十六年百海

必の有古王より献ふとりし衆多衆

とりしの沢るひそと集ふ新す

・衆のる弱ふむわ不ひをよ

・新すいし三島をぬむるる連ハ

一書ふ云翁の自注を形しあひあひ花の

設るりとりし書有てその注ふ日箱根衆

ふをありてるをわぬむいしとせしむる衆向甚

わたりしと云く予はししわらく

申しし翁の自注るりしめりる甚しき

華説るりそ連伊豆の三島を東海乃

るりそ連を拜むるるとる後り一きや亦川

より川邊一初るるとりし魚きやあまの

往還るり海乃とあそりし一かたるると

いしを往還るりあそりし田舎るりし

るりをあそりしとやしるりし

心る神社考曰伊予実徳患早祈之令

能因法師詠和歌倭大雨未不枯云

三島の額るる免儀依理郷の昔日本

惣徳守三島大明神と云く天孔川萬代

多ふをいしとせあそりし守神るりハ

神ふの伊予國三島を拜むる連ハ必

とやからむすりそまのり弱ふ雨おかひせ  
よと附しつる有りうらふ本拙のありき  
と解きせつる有り花説ふうらふい  
之島とや由來を面呈号就ふありて現蓮  
あはれ就化して石と別るは母蓬萊方丈  
羸例の三島浮ひ出の故よ三島とあり  
三島を登武帝天平五年此出脱ありと  
まゝも存宝亀年中伊豆よ迂産按はよ  
うは守とあり又清輔新後集よを注り  
必りて秋岡の雨との説をともありあり  
伊とち実徳を述べおそくくを伊とれい  
実説るゝむその説次トよヤ

● 急佛よ狂人傳い片くあり  
愚者なり或ものよ観山の平等供なりといふ

佛をたをせとありて白夜の修りて是説  
を履なりと系れ方一なりは説りて後船  
をそののみ伊との西下りを食して目を  
送りたる玉の守れ説りて才子浄言阿  
周梨よ對面ありて又そ連よりのゆく来り  
志らけ出れりたりとまゝと連ハ三島を伊と  
る有り必定有り

● 漢語  
● 連歌の奥をせりす後  
● 歌よせらるむら松れ舞  
● 常世の和菓子舟鳥帽子若くあり  
五芳曰松永彈正久秀忘其の城よと連歌  
ありありしと敵ららるく録波を注く  
まよふ今一白階むとて若白すきまよる  
芦のりしむら漢語のありきといふあり

第〇として後げしりたり 愚考松水の侍を流  
させり侍を宗祇の佐をむ

うき世の流ゆくと高のえをせぬ  
惜まじし宿の本権のちりていよ  
のちすむ女きめくうらし  
山崎み乳をとの心猿の浮くま  
いのちを甲斐の代と見えよ  
法の七我意髪を 記れたむ  
はつりしれ記をとらむ事の  
笑目よりの車ころをゆくと形れ陰  
たりしを小雨の白ゆらうま  
のこる雪のころりしれど  
春の故より流ええと通りより子細  
志にけりれ碑 つて世をとらる

● 愚考の侍をさうり 流り 新記

● いげしり 肩をさうり 守りまぬく

● 考し流を 柵の巻よ 改申 将取とらぬ

ふ償るよをさうりていよその夜ゆふさら  
いとありく侍をさうりていよその夜ゆふさら  
あふ流をいとわの君の流りしれ記  
し侍をさうり流をさうりていよその夜ゆふさら  
まのるよをさうりていよその夜ゆふさら  
いよそのよよ此おの侍をさうりていよその夜ゆふさら  
よ歌を償るよをさうりていよその夜ゆふさら  
侍眉をさうりていよその夜ゆふさら  
あよりさうりていよその夜ゆふさら  
くしきさうりていよその夜ゆふさら

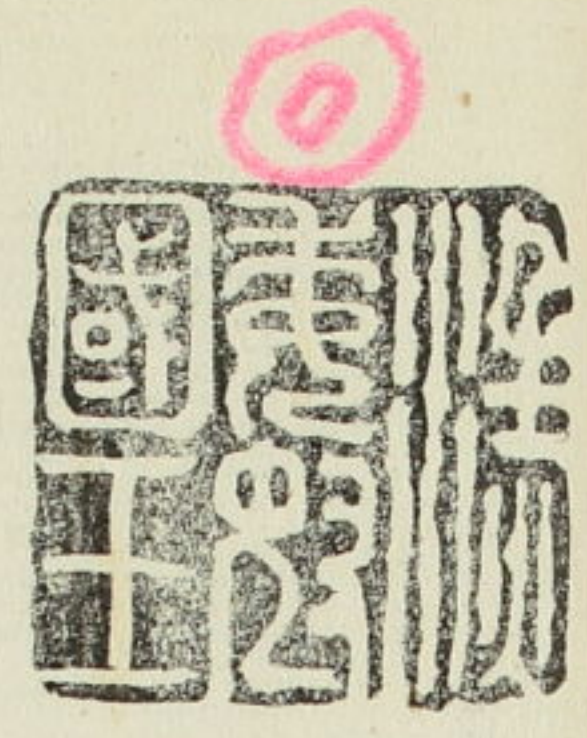


云のちる玉の片はらけは是より太宰又或いは  
片のちる玉の片はらけは是より太宰又或いは  
申のちる玉の片はらけは是より太宰又或いは  
・弘明の堂に於ての事  
・待よとの障を障るる事の中  
・なよとの障の事  
・るよとの障の事  
・門を魚を寸杖の事  
・眼を鼻よとの障の事  
・あゝおのの牧の事  
愚考は祇園の此寺を法華寺と云ふは、  
の武士の侍に次るる義利義利の牧之  
統日本紀曰文武天皇四年於祇園宮  
地教牛言云

・流の奔、夕日を月よあゝとありて  
・乳の乳、至杖を杖よ守るなり  
・柳の葉、の木の葉を花の事  
愚考は此の事、此花を花と云ふは、  
胡蝶の形、此花の事、此花の事、  
古今集、此花の事、此花の事、  
るる花を花と云ふは、此花の事、  
ふ己の火を本と此花の事、  
さゝく、此花の事、此花の事、  
せの丑よ、又うね、此花の事、  
・此花の事、此花の事、  
・人、此花の事、此花の事、  
・酒、此花の事、此花の事、  
愚考は是より、此花の事、



ありて後一き奴の陋一き口をとりて号  
 号をとりし若種多しや日融一なる  
 則後て曰今より後皇子を号けり  
 て曰今武皇子と稱中一なりといひ終て  
 即胸を通一して殺一し今よ至て日本  
 武号と稱一し中一彼系所一号けり  
 一号号一増一系行天皇二十七年二月  
 一そ一の悪情懸懸といひ一統系一増  
 一して人王十一代垂仁天皇八十六年丁  
 巳漢光武中元二年漢朝一貢す一よ  
 一して國王の印を賜ふ其印文化  
 年中統系一して去中一より一金の印  
 の摸方八分程白字小篆



印文 漢委奴國王  
 文化三年迄千七百五十年也

後漢書東夷傳曰建武中元二年倭奴  
 國奉貢朝賀使人自稱大夫倭國之極  
 南界也光武賜以印綬云一尙の面を年  
 一の増分のりよて彼窠を一盗人共  
 一酒盛一と増一れとも次の佐志川上  
 桑所と引起一して増一るるをその  
 穴よ金山といひ強盗す其るるや金山の  
 洞といふなり一此國の武と名る日本武  
 一入一初と和稱曰武略神通日本  
 武術之大祖也尾刻斐田大明神是之



さて此等々を鑑みしうは守りもその名所の  
 画工よそのそと鑑て三台此等々を鑑  
 とくつりこさつてその名をさうは守りも加  
 養川の名水をとさしおきてはけりしに  
 剣醒井より汲み汲み汲み汲み日本武  
 尊何吹山の麓より大蛇を踏きぬけり  
 時水は火のさきくふ不ぬきくふよ  
 井の清水もいこくくくくくくくく  
 りよゆしよ醒井と号すりよその故り  
 強よゆし守りよを尊ひて日本武尊  
 征伐と稱しつりよて慈徳の故りよと  
 よ合せしつりよ

玉川や梅のく六つ此所よて  
 紅湖しよ年よりりよ

弁花の時程もさ見えゆりよ  
 愚考守り紙よ白後於於於  
 みるさつこのと見えゆりよ  
 年よりのりよ  
 みるまのりよ古歌の傳りよ  
 行りよこせえ者りよ  
 南むく葛家の畑の雲消て  
 秋と暮るをうりよ  
 保はつる楯の廣葉んさ  
 費よん費りよ  
 一書よ楯の葉よ保はつる古き  
 と見えいけりよ  
 雲を踏りり秋の心を慈の字り  
 きこ心をそりり  
 愚考守り子載集季る朝

辰出としよりちりしうりなり直しよる秋  
の心を愁としりいそ達此依例并陸およそ  
出りり又古詩より直將愁字依秋心

● 鹿れ者をもりのいそぬ人おつち

愚をる鹿の音出の音もなりありあはるり  
多りて心を入して出りありあはるりあはるり  
近海の地土言れ音落の音替の音略  
の音もなり集津より見ぬ入音音舞音  
そ達元別あり年よりあはるりあはるり一極よ  
心ゆりるるな中ありあはるりあはるり  
琴の音笛の音とるりあはるりあはるり  
の音としりあはるりあはるりあはるり  
出りりあはるりあはるりあはるりあはるり  
大ちりあはるりあはるりあはるりあはるり

まぬるりあはるりあはるりあはるりあはるり  
いへんとして梨子とてや栗咲やとるりあはるり  
るり梨子の花とてや栗れ花とてやとるり  
漸ぬるりいへん依例平木の地落るる達  
とてあはるりあはるりあはるりあはるり  
ししてせんとてあはるりあはるりあはるり  
は亦新名目の歌おけしてあはるりあはるり  
歌まぬるり白編地落のうらあはるりあはるり  
し割しあはるりあはるりあはるりあはるり  
とるりあはるりあはるりあはるりあはるり  
つりあはるりあはるりあはるりあはるり  
あはるりあはるりあはるりあはるりあはるり  
とるりあはるりあはるりあはるりあはるり  
とるりあはるりあはるりあはるりあはるり

のくき 冨の 壽 ちむ 月  
谷の 雨 杖 七里を ぬき すらむ  
何 馬 河 内 の きれ 川 面  
水 くら 子 未 居 く 音 ハ 呼 を えて  
菰 を せ ろ り の 院 した を 田  
二月の 蓬 妻 人 ぬ す せ ろ り や  
蟬 ち ら 牛 の 運 き 日 の 秋  
勝 物 ち ぬ 越 の 端 を 織 り 子 子  
お の ち ら ち ら ち ら ち ら の 奇 せ せ  
暮 の ち ら ち ら 柵 依 り 大 屋 中  
木 魚 ち ら ち ら 山 崎 ち ら ち ら  
田 人 を ち ら ち ら ち ら 月 夜  
あ せ ち ら ち ら ち ら ち ら ち ら  
同 一 智 後 ち ら ち ら ち ら ち ら

心 なる ち ら ち ら ち ら ち ら  
之 ち ら ち ら ち ら ち ら ち ら  
一 書 ち ら ち ら ち ら ち ら ち ら  
ち ら ち ら ち ら ち ら ち ら ち ら  
ち ら ち ら ち ら ち ら ち ら ち ら  
思 ち ら ち ら ち ら ち ら ち ら ち ら  
り ち ら ち ら ち ら ち ら ち ら ち ら  
室 の ち ら ち ら ち ら ち ら ち ら ち ら  
ち ら ち ら ち ら ち ら ち ら ち ら  
卿 ち ら ち ら ち ら ち ら ち ら ち ら  
後 ち ら ち ら ち ら ち ら ち ら ち ら  
す ち ら ち ら ち ら ち ら ち ら ち ら

カ又カカ  
ヤハ

又も終る母のゆりやういなるく〜  
とくや或時申納之の内れ人の新よあつて  
西國よりの船さう一羽りたるを何い見えて髪  
を切てみちたてく〜  
と書て〜  
と書りて〜  
るけ入侍りて後ひさす〜  
雨よ高急南無らつてあひひす〜  
うまじまのい多のこ〜  
期言急仏〜  
徳牛〜  
唐の徳〜  
ええ侍り〜

ありと〜  
か〜  
とるを〜  
侍れ眼〜  
竹海〜  
梅〜  
むら〜  
地〜  
伊勢〜  
樽撰〜  
愚考〜  
〜  
あ〜

此の連なりを古今の通例あり傳ふ曰村  
るを日月と七月とよ利ゆ押はるなりむす  
ひ込てを梅なり梅なりといふの事には月  
るをいふはらるるを傳ふなりて此の地とらる  
夜の白より見えぬ所の葉斗ふおむく地を  
暑中夜なりといふ事なり七月と  
見えて地とりの夜を穢異の傳を指せしり  
す事なりといふより山や林は白く此の地なり又  
それらを伝ふる林事よりなり地とりの夜を林と  
るなりといふ事なりその事なり此の地は次ふ伊勢  
入傳つるるを昔伊勢の記に曰く此の地は  
てよありといふはくむ此の地を年より  
や、朽よりなりをの地のはくむ此の地は  
ふ此の地は不なりといふ事なりて此の地は

お留

ゆいよみきりの地とる中こそその地の地の  
朽といふ事なり此の地は不なりといふ事なり  
此の地は不なりといふ事なり此の地は不なり  
見すなり此の地は不なりといふ事なり  
又よの地の短白洞を袖よふ地を短よふ地とす  
月を山よふ地よふ地を山よふ地とす  
ありて山よふ地よふ地を山よふ地とす  
手なりといふ事なり此の地は不なりといふ事なり  
の本体といふ事なり此の地は不なりといふ事なり  
いして美野の地の地をいふ事なり此の地は不なり  
地をいふ事なり此の地は不なりといふ事なり  
るよの地は不なりといふ事なり此の地は不なり  
山はよふ地よふ地を山よふ地とす

つゝるを本體と心得るの上より其を  
角も自在の法にいつくはるるの如き  
らるる學問ありて其を自由の法と  
のりしむるは二つはりのあること  
なり其の法に出づるは其の法に  
の法に古往還來二つあること  
ありて其の法に自由の法に  
をまへて其の法に自由の法に  
をまへて其の法に自由の法に  
をまへて其の法に自由の法に  
をまへて其の法に自由の法に  
をまへて其の法に自由の法に  
をまへて其の法に自由の法に  
をまへて其の法に自由の法に  
をまへて其の法に自由の法に

三つは其の法の案に後述の罪人の事

・後述の法に代りて其の法に

・吾士とよむるは其の法に

愚考後述の法を一里法にて稱して其の  
人を其の法に其の法に其の法に  
造らしむるは其の法に其の法に  
うこりて其の法に其の法に其の法に  
まはるるの例に其の法に其の法に  
るなり又其の法に其の法に其の法に  
ゆかりしむるは其の法に其の法に  
て其の法に其の法に其の法に  
るなり其の法に其の法に其の法に  
るなり其の法に其の法に其の法に  
るなり其の法に其の法に其の法に  
るなり其の法に其の法に其の法に  
るなり其の法に其の法に其の法に  
るなり其の法に其の法に其の法に  
るなり其の法に其の法に其の法に

曰東海上有吾士任属其仕兄才二人

世之議曰吾不長天子不友法侯耕而食之取而飲之吾不求於人無上之君無君之祿不仕而事力云々又祖庭華苑曰居士之四德と以ふ不求官士寡欲蘊德居財大富守道自怡云々

紅ふ牡丹十里の糸を分て  
愚考東坡賞牡丹詩ふ十里珠戸半上鉤  
と云ふ牡丹ふ十里糸の名あり千里の糸とすの糸非るあり  
雲すむ若ふあつ湯をま  
岩根ふみききく化苑と若ふひま  
笑一や三井のあ法師とま  
比附さる愚考法苑の字案を待  
何のあ意ありなきやうふ返致して

管絃をせざるす膏を形りあり  
何れ其れ盧山よとありあり  
愚考管絃とを緑竹のあつるあり  
白虎通曰八音者樂記よ土曰埙竹曰管  
皮曰鼓鞀曰笙絲曰弦石曰磬金曰鐘木曰祝  
曰祝云々或る管絃或ハ鐘鼓と合す  
ふるありとて是別の盧山ハ枕詞ありて  
枕詞は日本の文苑ありとて日本  
盧山ありとて山寺の後院院寛元三年  
任心覺倫上人の建まありて系与所  
今出川通とて日本系学あり晋の惠  
遠法師老翁と化して盧山ハ二字を  
任心よ授くありて日本盧山天台講寺  
と号す





